

氏名	池田芳人 いけだよしと
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第121号
学位授与の日付	昭和39年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	人上顎骨の発生学的研究 特に歯槽部並びにその骨梁の発生について
論文調査委員	(主査) 教授 堀井五十雄 教授 美濃口 玄 教授 西村秀雄

論文内容の要旨

著者は1か月～10か月に至る人胎児20例の頭部連続切片標本を作り、主としてヘマトキシリン・エオジン染色法を採用して、上顎骨の発生学的研究を行ない、次の興味ある事実を知ることができた。

- 1) 上顎骨は下顎骨よりやや遅れて発生し、胎生1.5か月頃から乳犬歯歯胚相当部の外側上方附近から化骨現象が開始され、特に切歯骨と狭義の上顎骨には明らかな化骨起始点は認められなかった。
- 2) 顎骨が化骨現象を開始する当時の網眼様造骨部は、一連の「く字形」骨板に発育し、これが上顎骨質の主幹骨梁となり、その上方部は前頭突起に、下方は顎骨の外側板に発育し、屈曲部から内側に向っては、将来の口蓋突起に成長する化骨像が認められた。
- 3) 「く字形」主幹の下半分の外側には歯槽外板が、内側には口蓋突起が形成され、まもなく口蓋突起基底部の増大によって、これと外板との間は溝状となる。著者はこの溝を上顎溝とよぶことにした。
- 4) 上顎溝は歯胚の発育するにしたがって次第に深度を増し、外板と口蓋突起基底部より発達した内板はついに歯胚を被覆するにいたる。
- 5) 歯槽部は歯胚の発育に比例して形成され、上顎溝をなす外板と、内板の頂縁は歯胚を被覆するようになるが、この状態は胎生2か月の中期において最初乳犬歯歯胚部に現われ、この部を起点として漸次正中および後方に波及するのである。
- 6) 胎生2か月頃より、乳犬歯歯胚と第1乳臼歯歯胚間には小骨梁が形成されて、両歯胚を隔離し、これが上顎溝内に現われる最初の歯槽中隔となる。歯槽窩内中隔は胚生末期に至っても発現しない。
- 7) 顎骨骨梁は主幹に対して平行であるが、同時に前上歯槽神経管に対し、放射状ならびに切線方向の経過をとり、一方繊細な中および後上歯槽神経枝周囲の骨梁は、これらに対し放射状配置を示している。
- 8) 歯槽外板を構成する骨梁は比較的短かく、これが歯小囊に沿って歯胚を囲繞しているが、詳細に観察すると、むしろ歯槽窩底部を走る上顎神経枝に対し、層状(切線方向)または放射状に配列している。
- 9) 歯槽内板は口蓋突起の基底から歯胚の内側を被覆するように突起し、これを構成する骨梁は長く歯胚

に対して層状（切線方向）を呈しているが、これまた歯槽窩底の神経枝には放射状配置を示している。

10) 歯槽中隔をなす骨質骨梁は複雑に配置されるか、主として両歯胚を結ぶ方向を示すとともに上顎神経の末端に対し、これを囲繞（切線）または放射状をなす方向をとっている。

論文審査の結果の要旨

著者は種々の月令の人胎児を用い、上顎骨とくに従来みるべき研究の少なかった歯槽部の発生について、連続切片標本によって観察しつぎのような知見を得た。

- 1) 上顎骨は下顎骨よりもやや遅れて発生し、胎生1.5か月ころから乳犬歯歯胚相当部の外側上方部附近から化骨現象が開始され、ぜんじ發育し上顎骨の主幹骨梁は「く」の字形となり、その上部は前頭突起、下部は外側板に、屈曲部から内側に向っては口蓋突起に發育する化骨像を呈する。
- 2) 主幹下部には外側に歯槽外板が生じ、これと増大した口蓋突起の基底部との間に著者のいう上顎溝が生ずる。歯槽外板と口蓋突起から発生した内板は歯胚を被覆する。
- 3) 歯槽部は歯胚の發育にともない、まず犬歯歯胚部から形成され、ぜんじ正中および後方に波及し、乳犬歯歯胚と第一乳臼歯歯胚の間に最初の歯槽中隔が現われる。
- 4) 顎骨骨梁は主幹に対して平行であるが、歯槽内、外板では歯胚を囲繞する方向をとり、前、上、後上歯槽神経管およびその神経板に対しては切線または放射線方向を示している。

以上著者の論文は上顎骨ことにその歯槽部の発生に新知見を加えたもので学術上有益であり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。